

廃校を活用した敷地地区の地域再生デザイン構想の具現化

静岡文化芸術大学 文化政策学部文化政策学科 都市・地域ゼミ

指導教員：教授 藤井康幸

参加学生：栗山 紫央里、酒井 美緒、杉山 菜奈子、鈴木 優真、
田中 悠貴、田中 祥仁、千田 綾夏、長橋 成代、安岡 航輝

1 要約

本研究の目的は、磐田市北部に位置する敷地地区(豊岡東地区)を含む豊岡地区の地域再生デザインの具現化である。

産官学連携のもと、延べ4回のワークショップと現地調査を実施した。研究全体のテーマとして「地域の探究」を掲げ、敷地地区にある廃校の利活用にとどまらず、豊岡地区全体をフィールドとして、農業、文化、イノベーションの視点から総合的に、地域再生デザインの検討、提案を行った。地域活性化の参考事例として、西伊豆町ほかの伊豆半島における地域活性化施策、廃校利活用について事例研究した。そして、昨年度提案した「干し柿ロード」の実行性を探るべく、大学構内にて干し柿づくりのポスターを展示し、アンケート調査を実施した。昨年度に提示したデザイン構想をさらに深めた。

2 研究の目的

敷地地区は、静岡県の「ふじのくに美しく品格ある邑づくり」に参加するコミュニティである。地域住民の高齢化により廃校周辺の里地里山の保全が課題となっている現状を踏まえ、廃校利活用と合わせて、森林の活用のあり方を探ることを研究の目的とした。



図1 旧豊岡東小学校(2015年廃校)

3 研究の内容

本研究においては以下を実施した。

(1) 現地でのワークショップ

2023年8月、10月、12月、2024年1月と4回のワークショップと、2023年11月に現地視察を実施した。

豊岡東地区環境保全協議会、磐田市自治会連合会、磐田市豊岡支所、磐田市豊岡東交流センター、静岡県中遠農林事務所農村整備課、株式会社キャタラー アーククリエイションセンター、コンセプト株式会社、磐田市地域おこし協力隊員、東京学芸大学、地域住民の方々(12月)の参加を得て、意見交換した。

1) 8月ワークショップ 今年度の検討方向の確認

昨年度、農業従事者とのやりとりにおいて議題に挙げたJAに焦点を当て、JAの関与する「小さな拠点」(農村RMO(regional management organization, 地域運営組織))の形成について事例調査、報告した。地元からは、廃校における週末農業の実施、地域全体における森林活用、地域資源の資産化などに関するコメントが出された。

2) 10月ワークショップ 「グリーンツーリズム」「森林活用」

グリーンツーリズム、及び、森林活用(森林サービス産業)の2つのテーマを設定し、概念整理と事例調査を行った。出席者からは、グリーンツーリズムにおいては、体験一つひとつの価値、また、交通の利便性以上に、地域全体に回遊性をもたせることが重要であり、実行力のある中心人物、優れた広報活動が必要との助言を得た。

3) 11月 豊岡地区視察

(株)キャタラーの綿花畑と下野辺工業団地に隣接する森林、また、敷地里山公園(旧豊岡東小学校隣)、とよおか採れたて元気むらを視察し、豊岡地区の地域資源を再確認した。

4) 12月 「フルーツフル・ノールズ構想ワークショップ “どうする豊岡”」

豊岡東地区環境保全協議会主催の年次ワークショップでは、東京学芸大学の鉄矢悦朗教授による「螺旋と摩擦 STEAM 探求」新聞紙を用いた体験型学習の方策、(株)キャタラーによる地元の産品(赤紫蘇、お茶)を使ったスイーツの試食会、遠州大念仏保存会による大念仏の実演、(株)キャタラー社員のジャズピアノストバンドによる演奏などが行われた。

(2) 参考事例の訪問

豊岡地区の地域デザインを検討するため、2023年9月に以下を訪問した。

1) 山田川自然の里公園(三島市)

ボランティアを中心とした「山田川グリーンツーリズム研究会」と三島市行政の協働による市民農園と里山風景を楽しむことができる散策路の整備された公園である。

この公園が運営する市民農園の主な利用者は定年を迎えた人で、60代~70代の男性が多い。また、自宅に畑がない人が主に利用している。山田川自然の里公園は市民農園の運営だけでなく、環境保全の役割も果たしている。環境保全地区には保全条件があり、草を刈る場所を決めるなどし、手入れがなされている。運営を担うボランティアの方は、子どもたちが思う存分自然に触れられるように多様性の保全を目標に掲げている。

2) やまびこ荘(西伊豆町)

やまびこ荘は、1973年に閉校した大沢里小学校に対する地元住民の校舎保存の要望に答えて1976年に改修、開業された西伊豆町営の宿泊・交流施設である。2015年からは指定管理者制度が導入されている。

自然に囲まれた場所にあり、一般の宿泊のほか、学校の宿泊体験やスポーツ合宿、会社の研修にも利用されている。建物には小学校時代の面影が残り、かつての教室は宿泊部屋として、25mプールは温泉プールとして活用されている。また、バーベキュー設備の貸し出しも行われている。西伊豆町役場職員によると、メディアの特集により利用者が増加しているとのことだった。

3) 西伊豆町役場まちづくり観光商工係

西伊豆町の令和5年の人口は6,989人で高齢化率は52.6%と県内で最も高い。以前は水産業が盛んであったが、現在は観光業が主な産業となっている。観光客の内訳としては国内観光客が多く、ロケ地の誘致を積極的に行っている。観光プロモーションの一環としてデジタルサイネージを活用しており、訪問時点で65か所、町外にも10か所増設する予定とのことであった。今年度中に閉校予定の小中学校の利活用について、ワークショップにより検討中とのことで、敷地地区の廃校を考える上で参考となった。

4) 中伊豆大見の郷「季多楽~きたら」 グリーンツーリズム豆腐づくり

中伊豆大見の郷「季多楽」はグリーンツーリズムの拠点として、特産品の紹介やさまざまな体験などを通して地域の活性化を図ることを目的とした施設である。事例調査訪問にあわせ、グリーンツーリズムの一メニューである豆腐作りを体験した。体験には豆乳の試飲や豆腐製造工場の見学も含まれており、豆腐について学びながら作る過程を体験することができた。最近では、外国人観光客向けのガイドが用意されており、地域の実状に合わせた受け入れ体制が整えられていた。スタッフの方とのアットホームな雰囲気の話と体験を交えることで学びと楽しさが共存し、記憶に残る観光となっている。

(3) 昨年度提案の具現化へ向けた検証

昨年度に提案した「干し柿ロード」の実現可能性、及び、敷地地区のPRや関係人口創出への効果を検証するため、以下を実施した。

1) 干し柿づくり

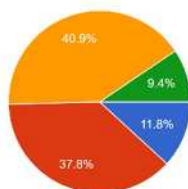
敷地地区名産の「立石柿」を使って、実際に干し柿をつくった。



実際の干し柿制作の様子

2) 静岡文化芸術大学構内での干し柿づくりのポスター展示、アンケート調査 ウェブアンケート調査を実施し、127名(うち、学生が86%)からの回答を得た。

Q5. 敷地地区は柿の有名な産地です。浜松駅近くの本学から、約20km
(車-約40分/電車-約1時間半/自転車-約1時間...絵のような干し柿ロードがあれば見に行きますか。
127件の回答



● 干し柿ロードを目的に見に行く
● 敷地地区で他にも目的があれば見に行く
● 近隣地域で他にも目的があれば見に行く
● 見に行かない



上述の設問に対して、約1割が『干し柿ロード』を目的に見に行く」と回答したが、他の選択回答における自由記述から、距離・アクセス・時間のハードルに対して、「干し柿ロード」以外の目的が必要との指摘がなされた。目的となりえる魅力あるものを聞く質問回答では、「食」「景色」「体験」に関するものが多く見られた。

3) 敷地地区での干し柿づくりのポスター展示

豊岡東交流センターの展示スペースにて、干し柿づくりのポスター展示を行った。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

①昨年度12月の提案をもとに、地元特産品を使ったシンボル(干し柿ロード)の制作を具体化する。②敷地地区で想定される関係人口に関して、例えば、SNSを利用した地域資源の広報戦略、耕作放棄地の活用、地産地消のマルシェ、また、事業内容のアイデアを提案する。③内部人材並びに外部人材の掘り起こしにより、地域活性化のプラットフォームを担う中核施設のあり方とその管理運営方策を検討する。

(2) 実際の内容

B: 以下のように当初の計画を変更して研究活動を展開した。

①については実際に干し柿をつくったが、干し柿制作中の鳥が来てしまうことの懸念から、学内での干し柿制作と干し柿ロード展示をすることができなかった。②については、森林活用をテーマに事業例及び事業案を10月のワークショップにて発表した。③については、8月のワークショップにて「小さな拠点」(農村RMO)の動向を報告し、敷地地区における展開方向について議論した。地元の中核組織である豊岡東地区環境保全協議会は、農村RMOを目指す意向であり、今後につながるゼミ活動となった。また、事例研究として訪問した伊豆地域では、地域活性化のためのプラットフォームと運営主体、内部と外部の人材のあり方を考察し、敷地地区の関係者に報告した。

(3) 実績・成果と課題

干し柿ロードは実現できず、代わりに、作成した干し柿の展示を提案したが、食品を展示物とする上での公衆衛生上の課題が浮かび上がった。代替として学内でのポスター展示とアンケート調査を行い、学生への敷地地区の PR をはかると同時に、第三者の意見を聞くことができた。また、敷地地区にポスター展示することで、本ゼミ事業の成果を地域住民に周知することができた。

(4) 敷地地区への展開

三島市の「山田川自然の里公園」は、耕作放棄地や森林に人の手を入れることによって、生物多様性の維持だけでなく、市民の憩いの場としての機能を果たしている。

研究対象である旧豊岡東小学校に隣接する「敷地里山公園」では、地元住民が市民の憩いの場づくりに参画し、交流を生み出すための空間が形成されている。敷地地区はグリーンツーリズムに取り組む基盤が整っていることがわかった。

西伊豆町の廃校を活用した宿泊施設「やまびこ荘」は、廃校のプールを地域資源である温泉と組み合わせ、他には見られない特徴を生み出していた。高齢化率が50%を超え、他の自治体よりも一歩先の対応を迫られている西伊豆町では、観光、地域経済活性化、移住促進などにおいて様々な施策が行われている。伊豆大見の郷「季多楽〜きたら」では、グリーンツーリズムのメニューの中から、豆腐づくりを体験し、観光のニーズが体験型に移行している印象を得た。

昨年度提案した「干し柿ロード」の実行可能性の検証において、実際に干し柿をつくり、アンケート調査を通じて、「干し柿ロード」に対する第三者の意見を収集したことで、学生にとっては多くの気づきがあった。敷地地区に対しては、実のある提案ができた。

5 地域への提言

敷地地区には既に、地域デザインの中核を担う組織である豊岡東地区環境保全協議会が存在する。当協議会がよりいっそう、敷地地区/豊岡地区、磐田市全体、さらには、外部の関係者との協働を通じて、具体的な事業に着手することが望ましい。農村 RMO は中山間地域等におけるいわゆる“小さな拠点”の形成を意図し、国のまち・ひと・しごと創生施策で登場して以降、全国的に大きな広がりを見せている。敷地地区/豊岡地区において農村 RMO が形成されることは、地域デザインを描くための大きな前進となるものとして期待される。

今年度のワークショップや現地訪問を通じて、豊岡地区にある米、野菜、果物など多種多様な「食」の資源を再確認した。今後は、これらの資源を組み合わせ外部へ発信することや、現時点では本事業に深く関わりをもたない地域住民も巻き込み、それぞれの技能・知識などの人的資源を結集することにより、地域の特性を生かした地域づくりに繋げたい。

6 地域からの評価

最初の交流は、廃校跡地利用をどうするのかをテーマで活動してきましたが、今年で三年目に入り、新しい切り口での拠点施設としての組み立てが整ってきました。それは、農政からの政策で、農村 RMO と云う地域再生の土台となる組織体の拠点施設として活用する方法です。それには、行政と相談しながらロードマップが必要となってきますが、今後の具体的な活動として、農村連携促進支援事業に応募し、DX 社会に対応した地域教育のボトムアップを仕掛けて行く予定です。その為には、これからも静岡文化芸術大学の技術・情報をご提供頂き、持続可能な組織運営体を構築して行きたいと願っています。

(豊岡東地区環境保全協議会 代表 乗松洋一)